

2014 年 10 月 25 日 (土)

高岡市生涯学習センター 研修室 503

14 : 00 ~ 15 : 30

「明治時代の外国人が見た立山信仰」

富山県[立山博物館] 学芸課主任

高野 靖彦 氏

1. 鎖国から開国へ

江戸時代の日本は、長崎の出島においてオランダ、清、朝鮮との貿易だけが許されていた。これがいわゆる「鎖国」である。しかし、1854 年（嘉永 7 年）に「日米和親条約」が締結され、幕府は下田、箱館の開港と領事の駐在を認めた。さらに、ロシア、イギリス、オランダとも和親条約を結び、



「鎖国」政策に終止符を打つ。1858 年（安政 5 年）には「日米修好通商条約」により、横浜、箱館、神戸、長崎、新潟が開港されることになった。

ただし、当時は外国との貿易に反対する日本人が多かったため、当初の公使館は寺院の中に置かれることになった。殺傷が禁じられた寺院にいる外国人を襲うことはできないだろうと考えたからである。さらに、幕府の役人が寺院の入り口を警護していたが、それでもたびたび襲撃事件が起きたので、幕府は横浜の居留地に公使館を移すことにした。

当時の外国人の迎賓館であった浜御殿の庭で撮られた写真を見ると、時の老中が一番前に座り、アメリカの公使が後ろに並んでいる。当時、外国人はお客さまではなく、幕府の役人にとっては目下の間人という意識であったことがうかがえる。また、老中は革靴を履いている。幕府の役人は外国の文化を受け入れつつも、いまだ警戒心は解いていない。こうした写真が撮影された明治初年頃は「近世」と「近代」がせめぎ合っていたのである。

やがて横浜に外国人の居留地を設けたが、石やレンガで造られた建物が並ぶ光景はそれまでの日本にはないものだった。公使館の前では、ちょんまげを結った馬車引きが主人（外国人）のお下がりの洋服を着ている。1869 年（明治 2 年）に電信ができ、明治 4 年に郵便ができ、明治 5 年に新橋－横浜間に鉄道（京浜鉄道）が敷かれた。一方、このころの京都の四条通の写真では、日本人の足元を見ると、みんな裸足であった。江戸時代は、旅に行くときはわらじを履いていたが、日常生活ではいまだ裸足だったのである。

当時、「日米修好通商条約」が締結されたものの、外国人の日本国内旅行は制限されていた。外国人は領事裁判権などの特権を有していた代わりに、5 港の開港場とその周辺地域に設けられた「遊歩区域」の外への立ち入りは禁じられていたのである。その外（内地）は非常に治安が悪いことを幕府は警戒しており、その境には「越ユルヲ許サス」という日

本語に英語、仏語を添えた高札が立っていた。そこを越えることを「内地旅行」と呼び、それができたのは最初、外交官だけであった。

2. 明治時代の内地旅行

開港当初から、外国人は「遊歩区域」外の温泉地へ保養目的で通行することを要望していた。さらに外国人の国内旅行の要望が高まり、1874 年（明治 7 年）には「外国人内地旅行允準条例」によって、外国人の内地旅行を許可制とし、翌年には外務省が「外国人旅行免状」を発行した。つまり、外国人はこの免状なしには勝手に国内旅行ができず、しかも免状は 1 回限りのものであった。その後、1894 年（明治 27 年）に締結（5 年後に発効）された「日英通商航海条約」などの新条約で領事裁判権が撤廃された代わりに、外国人の日本国内での居住・営業が認められ、ようやく外国人が自由に旅行することが可能となる。

さて、このころの富山の交通事情はどうだったのであろうか。1891 年（明治 24 年）発行の『日本一道路と鉄道』という地図を見ると、富山県内にはまだ鉄道が敷かれていないことがわかる。東京から直江津まで来た鉄道は、新潟へ向かったのである。東海道線の新橋－神戸間はこの 2 年前に開通している。このように日本全土にまだ鉄道が張り巡らされていない時代に、外国人たちが富山に来ることは大変なことであった。しかし、明治時代に外国人たちが立山に多く訪れているのである。この地図には港が多く描かれているように、鉄道がない所は船で行き来することになるか、もしくは陸地を徒歩・人力車で移動したこともあっただろう。

さらに 8 年後の明治 32 年の地図を見ると、金沢から富山に向けて線路を建設しているのが分かる。この段階では線路が点線で示されており、北陸線はまだ開通していなかった。明治時代、北陸地方の鉄道の建設は、最初は新潟まで線路をつくり、次に京都から金沢を結んでいる。最終的に富山と直江津が結ばれたのは 1913 年（大正 2 年）であった。ところが、現在の新幹線は最初に上越新幹線ができて、金沢から長野、東京を結ぶというように北陸新幹線をつくっているのは興味深い。つまり、北陸新幹線は明治時代の鉄道網の建設とは逆ルートをたどっている。

3. 明治時代に立山へ訪れた外国人

このように、明治時代、非常に交通が不便であった北陸に来た外国人たちは、果たして立山をどのように記録しているのだろうか。

立山に最初に来たのは、ウィリアム・ガウランドとエドワード・デュロンというイギリス人で、明治 8 年、信州から立山を訪れている。ガウランドは明治 5 年に大阪造幣寮の化学と冶金の技師として招聘された人で、初めて日本の古墳を発掘して、「日本考古学の父」と呼ばれている人物でもある。英国王立地理学協会の『例会議事録』に載っているガウランドの報告には、「1873 年、私たちが登ることができたのは御岳（御嶽）だけでした。この 2 年後には北方の立山に登り、ヤケヤマという 7600 フィートの面白い火山に登り当域の西端を経て下山しました」とある。このヤケヤマとは、恐らく飛騨の焼岳を指すと考えられるが、ガウランドは初めて「ジャパニーズ・アルプス」という言葉を使ったことで知られる。

4. ナウマンが見た立山信仰

立山信仰の最古の記録を残したのは、ハインリッヒ・エドムント・ナウマンというドイツの地質学者である。ナウマンが日本に来たのは 1875 年（明治 8 年）で、そのときは弱冠二十歳だったが、翌年に東京大学地質学教室の初代教授になっている。ナウマンゾウの命名者としても有名な人である。彼は、明治 9 年夏、政府の依頼で地質調査・鉱物資源の調査のために立山に来て、滑川から船に乗って直江津へ向かっている。ちなみに彼は、10 年間かけて日本全土を約 1 万 km 歩き、詳細な地質図を残す一方、日本の地図に初めて等高線を書き込んだことで有名である。また、彼はフォッサマグナを発見した人でもある。ナウマンは先日噴火した御嶽山など、その辺に連なる火山の噴火による堆積物を取り除くと大きな溝ができるはずだと主張したのだが、その大きな溝のことをラテン語で「フォッサマグナ」と名付けたのである。以下は、ナウマンが見た立山信仰の様相である。

「立山は、富士山や鳥海山と同様に、年々多数の参拝者が集まる有名な山の一つである。その楔のような形の山稜には、南側の斜面を登って到達することができる。この山稜を登ると、小さな台地のようなところに出る。そこから南方に、ごつごつとした信濃飛驒山脈の壮大な眺めを楽しむことができる」。

ナウマンは立山ばかりでなく、富士山、鳥海山にも行っているが、この三つの山で共通するのは、かつて修験道が盛んであったことである。私は今年の 9 月、鳥海山に登った。鳥海山は秋田と山形の県境にある山で、高さは 2236m とそんなに高い山ではないが、富士山のような独立峰である。山頂から少し下った所に大物忌（おおものいみ）神社があり、古来、修験道が非常に盛んだったという。

立山の記述に戻ろう。「日の出の時刻には、仏教の僧侶が豪勢な衣装をまとい、山稜の中ほどにある小さい祠のある台地に立って祈りを捧げる。僧侶が祈りを捧げる山頂にたどり着こうとして、何百もの参拝者が険しい断崖の間をめぐる狭い径を動いていくのは、生命と色彩にあふれた光景である」。

この時代は、新政府の政策により神仏分離が行われていた。しかし、立山では、いまだ僧侶の衣装で参拝者を導いていたことがうかがえる。さらに、立山の一ノ越、二ノ越などには、小さな祠がある。なぜ祠があるかという、その周辺に出っ張った岩があり、これは修験者たちが山を巡って修行をするとき、恐らく自分たちを守ってくれる結界するための石、護法石（ごほうせき）を設定し、そこに祠を設けたのだろうと考えられている。一ノ越は仏の膝、二ノ越は仏の腰、三ノ越は仏の肩、四ノ越は仏の首、五ノ越は仏の額と見なされており、そこを歩いて山頂に至る。鎌倉時代初期には既にこうした名称があったようで、この五つの祠は今も存在している。五ノ越は峰本社の下にある。裏側にあつて分かりにくい、機会があればぜひ見ていただきたい。

ナウマンは、参拝者が一個一個の祠に祈りを捧げながら歩いていることに非常に驚いているのだが、その後の記述が興味深い。

「10 年近く前（明治 9 年）、私は多数の参拝者の群れにまじって立山に登った。その中に、目の悪い足の弱い 70 歳ほどの老人と、そのお供をしている孫で、背が高く美男の 15 歳くらいの若者がいた。老人は、今にも死にそうにみえた。その老人が、急峻で岩ごつごつの山稜を登るのを助けるために、4 人の人夫が懸命に働いていた。私は、自分のこの

目で見たのでなかったら、立山のような険しい山を、こんな状態の人間が登るなどとは、とても信じなかったことであろう」。

ここで私が驚いたのは、明治時代に 70 歳近くなる老人が立山に来ていたということである。一般的に言って、立山信仰は江戸時代には盛んだったが、明治時代の廃仏毀釈で寺院などの建物が壊されて、壊滅的な大打撃を受けたといわれる。従って、この時代は立山に登拝する人も減っていたはずである。しかし、ナウマンの記録を見ると、青年に加えて老人までが参拝に来ている。これはどういうことか。このことに関連して、実は最近、ある古文書が発見され、NHK でも放送されているものがある。「立山禅定人止宿覚帳」という史料である。これは立山に登りに来た人たちが宿坊に泊まった際、その名前や職業などを記録した宿泊簿である。この記録を見ると、明治時代に 60 代の人が 39 人、70 代の人が 9 人登っており、最高年齢が 79 歳であったことが分かる。従って、ナウマンが見た光景は何ら珍しいものでなかったのである。

5. アーネスト・メイスン・サトウが見た立山信仰

続いて、アーネスト・メイスン・サトウが残した記録を見てみよう。彼は駐日英国領事館の書記官で、後には公使となった人で、1878 年（明治 11）年 7 月に友人のホーズ（元海軍士官）とともに信州の針ノ木峠の方から立山に登っている。彼等の一連の日本旅行は、『中部・北部日本旅行案内』にその成果が反映されている。サトウは、日本語が流暢だったので、当時の外交の重要人物と行動をともにしていた。また、彼は立山に来る前、1867 年（慶應 3 年）に佐渡から能登の七尾に向かうバジリスク号に乗って海上から立山連峰を眺め、その様子を「登頂約 1 万フィートの火山、立山の峰を中心に越中の連山が見えた」と海越しの立山を書き留めた最初の外国人でもある。

以下、彼の記録した立山信仰について、一部抜粋して紹介しよう。

「(1878 年 7 月 25 日)・・・参拝人の為のこの小屋（註：室堂）は、木造で風通しがとてもよい。松材のたき火で暖をとるので、煙が目にしみて痛い。寝具はないし、食器やその他の用具もほとんどない。食物として手にはいるのは水と米だけである。山はふつう 7 月 20 日から 9 月 8 日までの 50 日間で参拝人を近づける。今年はすでに 100 人の参拝者が登っていた。この地点からは、富山平野がよく見晴らせる」。

「(7 月 26 日) 朝起きると、ひどく雨が降っていて、雨模様の一日のようだ。山はまったく視界がきかなかつたので、登るのはあきらめることにした。・・・7 時 45 分に、登ってきたのと同じ道を下りはじめた。鏡石まで 1 時間。その石は道の右側にあり、表面が平らで直立した大きな石で、下部に像が刻まれている。45 分進むと、右手下りに、奇妙なぎざぎざがあるので姥石（ナースストーン）と呼ばれるもう一つ別の標識石のある地点に着いた」。

サトウが歩いた姥ヶ懐道は、今はほとんど笹の中で歩くことができない。ここで 2 年前、県の埋蔵文化財センターが行方不明になっていた姥石を見つけた。この石には、若狭の止宇呂（とうろ）という尼さんが、女人禁制の掟を破って山に登り、山の神の怒りに触れて石に変えられたという伝説が残っている。実は、姥石が見つかったときに、この石の上に石仏が置いてあった。姥石は高さが 1.8m、横は 2m 半ほどの大きさだが、石仏には「天明三年（1783 年） 右うはいし道」と刻まれていた。従って、この石仏はもともと姥石の上

ではなく、どこか道が分かれる所に置いてあったと思われる。誰かがこの石仏が道に放置されていて、かわいそうだと姥石の上に置いたのであろうか。

「(7月27日) 芦峯(あしくら)の佐伯正範宅で1日休んだ。彼は、立山開山の祖、佐伯有頼を祀って701年に建立された「オカミ」の神社という宮の神官の長である」。この「オカミ」というのは、「オヤマ」(雄山)の聞き取り間違いであろう。

「本殿あるいは祈願殿の後ろにある有頼の墳墓は、3フィートほどの小丘で、上に常緑のかん木シララケ(シラカケ)が植っており、不揃いの石で8フィート四方が固められている。杉の老木の立派な森の中である。文武天皇を祀った大宮と、手力尾神を祀った若宮の2つの宮がある」。

昭和初期に撮影されたとみられる芦峯寺の宿坊、善道坊の写真では、やはり大変高い杉の木が植わっている。今はもうこのような光景はなくなっており、この建物は現在、かもしか園の近くに移してある。

同じく昭和初期とみられる芦峯寺雄山神社の古い写真を見ると、大木の中に社があるのが分かる。現在も大宮と若宮という二つの社がある。

サトウが記録している、盛り上がった小丘。これをサトウは、正範から佐伯有頼の墳墓だと伝えられている。周りが柵で囲んであって、昔はこの手前に開山堂という建物が建っていた。今これは残っておらず、上に新築されたものがある。そこに行くと、慈興上人という立山開山の仏像が収められており、国指定の重要文化財となっているが、この像が公開されるのは元旦だけである。サトウは恐らくその像を見たのではないだろうか。

6. ウェストンが見た立山信仰

最後にウェストンが見た立山信仰である。ウォルター・ウェストンはイギリス人の宣教師で、「日本近代登山の父」と言われている人物である。日本山岳会の設立にも非常に尽力した人である。1893年(明治26年)と1914年(大正3年)の2回、立山に登り、『日本アルプス 登山と探検』と『極東の遊歩場』にそのことを記載している。

彼は、材木坂のことを書いているが、その後には次のような文章が続く。「急流の川床の最高点を進んで行くと、三方が峰々でできた一つの壮麗な『天然円戯場』で囲まれた、大高原にやって来た。ここからは広漠とした光景が展望できた。西に当たっては、広い越中平野が横たわり、その中に曲がりくねった川が流れ、又能登半島は、遙か日本海の彼方まで突き出ている。真東に当たっては、立山が、痩せた近隣の岩山に取り囲まれながら、その優美な山頂を屹立させている」。

ウェストンが見た『天然円戯場』とは、多分、周りが山々に囲まれた弥陀ヶ原台地のような所だろう。真ん中に餓鬼の田(池塘)がある湿地である。また、外国人の記述を見ると、「能登半島が見えた」という記事が結構多いことが印象深い。

「頂上近くには疲労者が登り易いようにと、鉄の鎖が二つ三つ一番険しい岩々にぶらさがっている。鋭い岩の円錐形山頂には、絵のような朱塗の社が、あたりを睥睨(へいげい)して、最高点(九千三百呎)を示している。殆ど槍ヶ岳からの展望に匹敵する、この素晴らしい景色を眺めようとしていると、この聖山の守り役をしている神主に連れられた巡礼者達の一行が、登ってくるのが見えた。神主はいかにも敬虔に儀式張って、その社の前にかけてられた、鷲の羽の組み合わせ模様が金で染めてある、紅の錦欄の幕を開いた」。

現在の雄山の山頂付近にも社務所があって、そこから峰本社への階段がある。500 円を払って階段を上ると、そこでお祓いをしてもらえる。明治時代の雄山山頂の写真では階段が見えない。そのため峰本社まで登るのが大変だったようだ。

記述は次のように続く。「それから彼は扉を開け、かずかずの靈宝を取り出し、不思議相に眺めている巡礼者達に見せた。彼の周りを取巻いて、昔の偉人達の話に聴き入っていた時の、熱心にうっとりとして聴いている彼等の顔つきは、見る値打のある光景だった。・・・次に神主は、鷲の羽の紋（註：違い鷹の羽）で飾られた美しい漆器の酒の容器と盃を持って来た。そして彼はその容器から、巡礼者達が喜ぶ酒をついでやった。彼の好意は又、一人ぼっちの外国人にも向けられ、神酒を飲みなさいと私をもていねいに招いてくれた」。

神主は外国人を避けることなく、今風の言葉で言えば、おもてなしをしてくれた。ウェストンはそのことに大変感動して、これを日本人の美德として記しているのである。

以上、立山信仰を外国人の記録から眺めてきた。明治時代の神仏分離令によって行われた廃仏毀釈の動きのなかで、芦峯寺の宗教的な施設も多く壊され、従って、立山信仰は明治時代には非常に廃れていたと考えられている。しかし、これらの外国人の記録からは、こうした激動の時代の中、立山に若い人ばかりでなく、高齢者も含んだ多くの人が登っていることが分かる。そう考えると、山麓の建物が破壊されたことと立山信仰が衰退したことは別なのではないかと思われる。つまり、立山信仰はもっと深く、民間信仰として根付いているものがあって、それは建物を壊されてもなくなるものではないということである。そうした民間信仰としての立山信仰とはどのようなものであったのか。近年、立山博物館ではこうした視点での研究も進めているところである。